

やさしい解説

# AIT通信

Accounting Information Technology

2007年(平成19年)10月創刊  
第31号 平成22年4月号

春が  
桜化粧の山々に  
薄紅香る



発行



有限会社エーアイティ研究所

〒969-1169

福島県本宮市本宮字小原田 200 番地 2

TEL 0243-33-5538 FAX 0243-33-4467

URL <http://www.motomiya-mcs.jp/ait/>

E-Mail [info@motomiya-mcs.jp](mailto:info@motomiya-mcs.jp)

## 新製品 iPad は電子書籍を普及させるか?

今年1月、Apple社はタブレット型端末「iPad」を4月に発売すると発表しました。B5用紙とほぼ同じサイズのこの新端末は、PDAとモバイルノートパソコンの中間を埋める製品として注目を集めています。

### iPadは、でっかいiPhone?

iPad、見かけはiPhoneがそのままでっかくなったような外観をしています。実際、中身もiPhone OS 3.2で動作し、使用するアプリケーションもiPhone向けのものを使用します。

今後はiPad専用のアプリケーションも増えていくと思われます。

iPadは、Wi-Fi(無線LAN)を内蔵していて、3G通信に対応したバージョンも用意されます。

16GB、32GB、64GBのフラッシュドライブ、9.7インチ縦型XGA(768×1024)のマルチタッチスクリーンディスプレイを搭載しています。



<Apple社 iPad>

### 電子書籍リーダー Amazon Kindle!

iPadよりも2年早く発売され、電子書籍普及の先駆者といえるのがアマゾン社のKindle(キンドル)です。KindleはiPadとは違い、電子書籍専用端末です。日本でも昨年10月に発売されましたが、現在のところ日本語の書籍は販売されておらず、日本での認知度もまだまだ低い状況です。

Kindleは大きさが違う2種類のバージョンが発売されており、A5版サイズの標準型と、B5版サイズのDXがあります。どちらもディスプレイはモノクロで、iPadと比較すると、使用目的を絞った割り切った設計になっています。



<Amazon社 Kindle>

iPadも主に電子書籍リーダーとして使用されることを想定しており、Apple社は電子書籍販売サイトiBook Storeの準備を進めています。

## 日本における電子書籍

日本における電子書籍の現状はどうでしょうか? 「電子書籍」とは、呼び名からも想像できるように、従来の紙媒体による印刷物ではなく、電子データ化された書籍(新聞・雑誌)をディスプレイを通して読む読み物です。日本ではまだ一般に定着しているとはいえない状況です。これは、日本語組版特有のレイアウトが技術的に電子媒体に馴染みにくいという面もあり、普及が遅れている原因のひとつと思われます。

しかし、「電子辞書」や「ケータイ小説」などもある意味、電子書籍であると考えることができ、そういった観点から見れば、日本でも電子書籍を受け入れる土壌が十分に整っているといえます。

電子書籍を供給する側からみた場合、ビジネスモデルとしての電子書籍は、成功していると言える段階ではないようです。Amazon社のKindleも、著作権が有効な(印税を払う必要がある)書籍からは利益を得られていない状況のようです。これは、電子書籍購入時のデータ通信料をAmazon社が肩代わりしていることにも原因があります。まずは電子書籍を普及させることが先決ということなのでしょう。

### 新聞も雑誌も電子化!

iPadやKindleに限らず、新聞、雑誌業界では電子化の波が押し寄せてきています。

新聞業界ではすでに電子化が始まっています。パソコン向けの電子版の提供や、iPod/iPhone向けの電子新聞用アプリケーションの提供がすでに始まっています。日経新聞も電子版の提供を始めました。また、「新聞オンライン.COM」では一般紙や地方紙、ローカル紙などの電子版をWeb販売しています。

雑誌業界でも、先日、「VOGUE NIPPON」がiPad版電子雑誌の発売を発表しました。動画のコンテンツを用意するなど、構成も媒体の特性を活かした工夫をする予定のようです。



端末の進化にともないどのような形態へ変化していくのか期待される電子書籍。まだまだ馴染みは薄いですが、今後、資源保護や利便性の観点からも、注目されます。

**編集後記** 新聞は積極的に電子化を進めていますが、日本ではいまいち普及していない感のある電子書籍。日本人は“本を手にする”ということが好きなのでしょう。装丁を愛でたり、その手触りを感じたりするのも本を読む楽しみのうちのひとつだと思います。私はそれほどたくさん本を読むわけではありませんが、本の感触は好きです。このまま電子書籍が普及しても、本は本で楽しむことができれば良いと思います。(本田)